

ヤクザル調査隊長の会通信

瀬切の森からの手紙



時には昔の話を (2) 1996年	02
調査員からのクーコール (4) 金岡 (馬場) 真里さん	04
調査メシ (4) 鯖節の味噌汁	06
やくざる七つ道具 (4) 無線機とトランシーバー 2	08
解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし (4)	10
ヤクザルなよんこま (4)	13
屋久島の森の住人たち (4) ヒメネズミとアカネズミ	14
24時間戦えますか (2) 定点に着くまで	16
犬山より	18



1996年

1989年から始まったヤクザル調査隊。これまでさまざまなことがありました。過去のある年を取り上げて、その年の調査を振り返ります。

1995年、隊長の好廣さんが心臓手術のため参加できなくなったことがきっかけで、国割岳山頂から大川林道終点付近までの分布調査を、当時京都大学の理学部3年生だった筆者が事務局長になって、学生主体でやり遂げました。そのてんやわんやは、「サルと屋久島」(旅するミシン店)に詳しく書きましたのでそちらを読んでください。その本では、あっさりとしか書けませんでした。その翌年、1996年も、1995年に勝るとも劣らない、たいへんな調査でした。

この年、好廣さんは屋久島には来られたものの、体力の回復が十分ではなかったため、調査には参加せず、運転手専門でした。わたしは大学院入試を控えていたので、一つ後輩の谷村寧昭さんが事務局を務めることになりました。当初、前年にやり残した、大川林道終点から永田岳までの地域を調査し、西部地域での、海岸から山頂までの垂直分布調査をやり遂げることを予定していました。

ところが、調査員集合の6日前、7月19日に屋久島を通り過ぎた台風6号のせいで、屋久島はたいへんなことになっていました。西部林道は、通称仏谷と呼ばれる場所で、道上500メートル付近から発生した巨大な土石流によって道が崩壊。大川林道もゲートの先で通行不能になってしまいました。西部地域の調査をあきらめ、屋久島の反対側、安房林道から黒味岳までの地域を調査することになりました。



下界から通った調査員がお世話になった永久保生活館。われわれは「えいきゅう」生活館と呼んでいました。2020年にわたしが訪れたときは、当時オレンジだった部分がライトグリーンに塗り替えられ、もちろん「保」の字もありました。



霧の黒味岳山頂で集合写真を撮る調査員。後列中央がこの年の事務局長の谷村さん。

屋久杉自然館のコピー機をお借りして地図をコピーし、それに500メートルメッシュの線を引くところから始め、調査地の下見もし、食糧計画も全部見直しました。当時のことですから、量の計算は全部電卓をたたき、紙に書き直します。そうして、集合日から4日めに、半分の調査員は石塚小屋と淀川小屋にそれぞれ入山。残りの半分の調査員は、栗生から、永久保生活館に移りました。永久保は、1993年から1994年にかけて、好廣さんが一家で住んでいた集落です。

急ごしらえの調査地だったため、調査はなかなか厳しいものがありました。淀川小屋に泊まった班は、毎日、淀川小屋から花之江河を経て、高盤岳に至る片道2時間以上の道を歩かなければ調査地に着きませんでした。運転手の好廣さんと大竹勝さんにとっては、下界からの長時間の運転も、たいへんだったと思います。そして何より連日続いた悪天候。毎日、雨に濡れるか霧にまかれるかして、服が全く乾かず、山小屋に泊まった人たちは、寒さに震えていました。下界にいる調査員への差し入れのリクエストは、「(乾いた)Tシャツ、カイロ、防水スプレー、(カップ補修用の)布ガムテープ」でした。まだ屋久島に大きなドラッグストアがなかった時代、何軒もの薬局を回って、真夏に何とかカイロを手に入れました。石塚小屋の調査員も淀川小屋に合流した調査後半では、一般の登山者も含めて小屋が大混雑し、トイレが「盛り上がる」事態になったそうです。

そんなたいへんな、ハプニングばかりの調査でしたが、屋久島東部上部地域でのニホンザル分布の貴重な資料として、調査の2年後、高畑由起夫さんによって論文*にまとめられ、われわれの努力は報われました。その後、生物の研究者になった当時の中心メンバーの多くとは違い、この年の事務局長の谷村さんは、工学部の学生で、大学卒業後、メーカーに就職しました。今、工場やデスクで仕事しているであろう彼の脳裏に、26年前の、あの熱くて寒い夏のことがふと思い浮かんだら、と想像すると、楽しくなります。おつかれさまでした。

(半谷吾郎 1993-2021 参加)

* 論文はこちら：好廣眞一、大竹勝、座馬耕一郎、半谷吾郎、松原始、谷村寧昭、久保律子、松嶋可奈、早川祥子、小島孝敏、平野晃史、高畑由起夫 (1998) 屋久島東部ヤクスギ林帯におけるヤクシマザルの分布と糞分析による食性の調査 霊長類研究 14:189-199

調査員からの クーコール

クーコールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。
各界で活躍する調査隊 OBOG に、クーコールを鳴いてもらいました。

金岡（馬場）真里 1995-1997 参加

ご無沙汰しております、もしくは初めまして。京大野研 1-3 回生だった 1995-97 年参加の馬場（金岡）真里です。最後に屋久島を訪れてから四半世紀経ったのか…と気付いて戦慄しました。調査隊での記憶は時間を経た今でもとても鮮やかで、その時の空気まで昨日の事のように蘇ります。初めて見た凄まじい星空、見慣れた花崗岩質に見慣れない植物ばかり生えてて不思議な感じがしたこと（ベースキャンプのナチシダとユノミネシダが屋久島で覚えた最初の二種）、サルたちの真似して囓ってみたけど苦かったアカメガシワの実（ハイノキの葉もあまり美味しくなかった。シキミは食べてない）、樹冠を見上げた時に印象的だった天狗の団扇のようなハリギリの葉、人生でただ一度美味しいと感じられた栗生の炎天下の喉越しビール（お酒激弱なのでごくごくビールを飲み込んだのは 45 年の人生でただ一回あの時だけ）、永久生活館の灯りに集まる虫を大竹先生に解説して頂いたこと、苔に埋もれるようにして着生していたオオクボシダの可愛さ、皆で歌ったマライカやもぐらの祭りの歌…思いつくままに書き並べてみましたがやっぱり懐かしいですね。25 年かあ…。

調査隊の後ですが、四回生で研究室に入ってから博士課程を経てポスト

クまでは窒素源やリン酸獲得に関わる植物-微生物（根粒菌・菌根菌）共生を、そして 10 年ほどの出産・子育てを経てパートタイムで研究に復帰（名古屋大学で技術補佐員を経て去年 12 月からポスドク）した今は、シアノバクテリアの光合成と窒素固定による炭素・窒素源の獲得をテーマに研究に携わってます。研究対象が植物からバクテリアに変わったので、勉強すること山積みで大変ですが知れば知る程面白い生き物です。シアノバクテリアは酸素の有無や明暗で生き方をガラッと変える凄い生物なのですが、単細胞でも多細胞でも動いても動けなくても、結局の所生き物はどこでどうやってご飯を食べて（養分を獲得して）生きていくのかっていうのが生き方の根源にあるのだな、としみじみ感じます。この辺りの興味の方向は、調査隊参加の経験に影響されていると自分でも感じます。

三月に十数年ぶりの学会発表が控えていて、学生時代なみに緊張しながら今必死に準備しています。子供二人（機械と音楽が大好きな小六息子、お絵かきと読書が大好きな小二娘）育て中なのですが、いわゆるワークライフバランスに悩みながらどうにかこうにかやりくりする毎日です。アカデミアに身を置く方々なら実感されているであろう先行きの不安定さに日々何かを削られますが、どんな環境下であっても興味あることに好奇心 driven で向かっていきたいです。

まだまだ収束が見通せないこのパンデミックに相次ぐ災害、大変な日々が続きますがどうぞご安全にお過ごし下さい。皆様のご健康とご多幸とご活躍をお祈りしております！



家族でミカン狩り。上の写真は、ミカンを狩るみかん。あるあるですが、家族の写真はあっても自分の写真がほとんど無い。

ばんばちゃん（と、われわれは呼んでいます）の御夫君の金岡雅浩さん（ヤクザルネーム：みかん）も、調査隊 OB。前のページの集合写真にも出ている彼と見比べると、月日は流れたのだなあ…と、思います。

調査メシ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘を、歴代の食当隊長が、レシピとともに語ります。



上野尚久 2017-2021 参加

鯖節の味噌汁

ヤクザル調査隊での椀物料理といえば、なにを思い浮かべますか。調査隊では、さまざまな料理を日替わりで作りますが、この料理はほぼ毎朝食べています。「ヤクザル調査隊の味」と表現する人もいます。そうです。正解は、鯖節の味噌汁です。調査期間中の調査隊の朝は相当早く、眠気から抜け出せない意識を醒ましたり、冷え込む山間部の早朝に身体を温めたりするのに、うってつけの料理です。また、調査期間中は朝食を色々作る余裕はありませんので、手軽に美味しく、そして具材を選ばない料理として、味噌汁が選ばれたのだと思います。これは私たちの朝食を彩るのに欠かせない一品なのです。

例年、味噌汁の仕込みは前日の夕方に始まります。正確には、夕食後からその日の調査報告のミーティングまでの間に行われます。食当を中心にして手の空いている人が、翌朝の味噌汁の具材を切ります。調査隊員 25 人分のある日の味噌汁の具材は、ナス 5 本、玉葱 2 個でした。これほどの量の具材に火を通すにはそれなりに時間がかかるため、具材たちは出来るだけ薄く切るようにしています。さらに、調査隊では出汁として屋久島の

特産品である鯖節を 2 本分加えます。鯖節は下界（人類の生活圏）にて、あらかじめ骨を抜き、薄く切っておき、真空パックに詰めて、山間部の調査地に持ち込んでいます。最後に、お椀一杯分の水を人数分計り、すべての材料を鍋に入れて蓋をします。ここで計る水の量を上振れて間違えると、次の日に飲むべき味噌汁が増えてしまい、お腹いっぱいになって大変なことになります。

翌朝、食当は昨晚に仕込んでおいた鍋を沸かし、味噌 536g を加えます。ただし、調査員の疲労具合によって塩味が変化するため、実際に入れる量は調整する必要があります。私が参加したコロナ禍以前の年では、かねよみその「麦味噌やまぶき」を使用していました。鹿児島で長く親しまれているようです。この味噌の味は控えめでさっぱりしていて、具材の味、とりわけ鯖節の風味を邪魔しません。これが調査隊の味と言われる所以です。ご自宅でもお手軽に作れるので、ぜひお試しください。

ところが 2020 年早春、新型コロナウイルス感染症が流行してしまったため、調査隊の活動に軌道修正が施されました。それは食事面に対しても影響を及ぼしています。従来 of 伝統的な食当を置くことはできず、鯖節の味噌汁はインスタントのスープや味噌汁になってしまいました。今後、感染対策が日常から切り離せなくなったとしても、「いつもの」鯖節の味噌汁をもう一度屋久島でお腹いっぱい味わいたいですね。



左：2017 年撮影。調査後、テントにてみんなで翌朝の味噌汁の準備をします。
上：2020 年撮影。コロナ禍では各自でインスタントの味噌汁を準備しました。

真空シーラーを導入し、鯖節をほぼ真空にして山の上を持っていくようにしたのは 2014 年ごろのことです。それ以前は、鯖節とは、「料理する前にカビをそぎ落とすもの」でした。「味噌汁に入れちゃったら分かんない、分かんない」と、そのまま入れてた人もいた気も…。

やくざる七、道具 4

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。30年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

無線機・トランシーバー 2

前号に引き続いて、無線機・トランシーバーのお話です。安全のためにも、調査のためにも欠かすことのできない大切な道具ですから、語るべきことは山ほどあります。

かつて使用していた特定小電力のトランシーバーは、たいへん濡れに弱いものでした。トランシーバーによる交信がもっともたくさん行われるのは、突然の悪天候に見舞われて、撤収の指示をするときです。続括者は全員に伝わることを確認できるまで、撤収の指示を出し続け、定点調査員も、大雨に濡れながら、早く撤収の指示が出ないかと、必死にトランシーバーにかじりつきます。トランシーバーはただでさえ断片的にしか聞こえないことが多い上に、大雨・大風の音でよく聞こえず、何度も何度も聞きなおすこととなります。そうして、横殴りに降りつける大雨の中、傘を片手に、トランシーバーをもう片方の手で持って交信を続けると、次から次へと、トランシーバーが壊れていきます。トランシーバーが濡れたときにもっともよく起こる症状は、「常時送信状態になる」という故障でした。トランシーバーは送信と受信を同時にはできませんから、その人以外の方は、ひたすら雑音だらけの電波を受信し続け、しかも故障している本人は、呼びかけても呼びかけても、だれからも返事がない、という状態に陥ります。本人が気付かなければ、続括者がその人の定点まで行って、電源を切る以外に方法はありません。

そんなわけで、調査隊では、特定小電力のトランシーバーは、常に、ビニール袋に入れて使うことにしています。

もうひとつ起こりうるトラブルは(無線機だけに限りませんが)、森の中でなくす、ということです。ただし、ほかの失くし物と違うのは、他の無線機で呼びかければ、見つかる可能性がある、ということです。わたしの知る限り、最初にトランシーバーを落としたのは、隊長の好廣真一さん、おそらく1991年のことです。好廣さんは、他の人からトランシーバーを借り、歌い続けながら探したそうです。特定小電力トランシーバーは1万円程度ですから、お金だけのことを言えばあきらめもつきますが、高性能のデジタル簡易無線機の場合、電池を含めて10万円ほどします。とある調査員は、森の中の何の目印もないところで、サルを追いかけている最中に、この高い高い無線機を落としました。そのあと2時間くらい、「***です。無線機を探しています」という交信が、調査地にむなしく流れ続けましたが、残念ながら、無線機は見つかりませんでした。今も、屋久島の森のどこかで眠っているのでしょうか。見つかったら、使えますかね…？

その後、もう二度とだれも無線機を失くさないために、外付けのマイクを購入しました。本体をサブザックに入れ、マイクだけ外に出しておけば、まず失くさないだろうというわけです。もっとも、わたし自身が、昨年の調査で、サブザックを林道に置いてPE群を追いかけて森に入ったときに、ポケットに入れておいた無線機を落としてしまいました。15分くらいで見つかりましたけどね。いやはや！
(半谷吾郎 1993-2021 参加)

特定小電力トランシーバーは、必ずビニール袋の中に入れて使うことになっています。この中には替え電池も入っています。



解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし 4

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

二ホンザル *Macaca fuscata*

霊長目オナガザル科マカク属。漢字で書くと日本猿…と思っているのは日本人だけ。漢字の本場、中国では猿はテナガザルのことで、マカクの仲間は猴の字を使うのです。だから漢字では日本猴。



腸内細菌：二ホンザルがさまざまな食物を食べる ための適応？

半谷吾郎 1993-2021 参加

Hanya G, Tackmann J, Sawada A, Lee W, Pokharel SS, de Castro Maciel VG, Toge A, Kuroki K, Otsuka R, Mabuchi R, Liu J, Hatakeyama M, Yamasaki E, von Mering C, Shimizu-Inatsugi R, Hayakawa T, Shimizu KK, Ushida K (2020) Fermentation ability of gut microbiota of wild Japanese macaques in the highland and lowland Yakushima: in vitro fermentation assay and genetic analyses. *Microbial Ecology* 80: 459-474.

わたしは、大学院生時代に、屋久島の上地域で2年間、二ホンザルの調査を行いました。それまで多くの研究が行われてきた西部林道と、もっとも異なっていたのは食べ物です。西部林道では、サルはほぼ一年中何らかの果実を食べることができる一方、そこからわずか7キロメートルほどしか離れていない瀬切の森では、果実が利用できる期間は1年のうちの4、5か月程度にすぎません。サルたちは、果実が利用できない時期には、ハイノキやヒサカキなどの常緑樹の葉を食べて暮らしていました。これらの結果をまとめた論文*の中で、わたしは、果実が利用できる時期とできない時期がはっきりしている温帯では、葉っぱのような質の低い繊維性の食物だけで生きていける能力が必要だ、と考察しました。

霊長類の中でも、コロブスの仲間は、葉をはさみのように噛み切る大臼歯や、微生物に葉っぱを発酵させるための、大きくていくつかにくびれて分かれた胃を持っています。しかし、二ホンザルのようなマカクの仲間は、葉っぱを食べるために、そのような特殊化はしていません。ところが実際には、屋久島上地域の二ホンザルは、熱帯のコロブス以上に葉っぱを食べています。なぜそんなことが可能なのでしょうか。

この疑問は、長年お蔵入りしていましたが、ある時、動物園のさまざまな霊長類から、新鮮な糞を採取してきて、それを彼らの食物の乾燥粉末と混ぜて試験管内で発酵させた、という論文を見つけました。この実験を、屋久島の上地域と西部林道の二ホンザルで試してみたら、腸内細菌の消化能力を比較できるのではないかと、というアイデアが浮かびました。ヒトひとりの消化管には、500-1000種ほどの細菌がいて、彼らが持っている遺伝子の数は、ヒト自身の遺伝子の150倍にも達すると言われています。消化管には常に外部から新しい細菌が供給されるので、環境の変化にすばやく適応するのに、腸内細菌が重要な役目を果たしているかもしれません。



西部林道でのサルの糞の採取。

腸内細菌の専門家の協力も得て、こ

野生動物の腸内細菌の研究は、2015年ごろから爆発的に進展しました。それは、検体中の遺伝子をすべて解読する次世代シーケンスの技術の普及と軌を一にしています。それまで職人芸的に培養しなければ分からなかった腸内細菌について、全容が次々と明らかになりました。

のアイデアは、2016年5月に、京都大学が主催する学生実習として実行に移しました。西部林道、大川林道の上部、安房林道の上部で採取した新鮮なサルの糞を、永田にある京都大学のステーションに持ち帰り、ヒサカキの葉の乾燥粉末と混ぜ、二酸化炭素を充填、密封して嫌気状態にし、37度で保存しました。学生たちが夜中に何度も起きて6時間ごとに注射針を刺して測定したガスの発生量をまとめてみると、見事に、上部域のサルの糞は、西部林道よりもたくさんガスを発生していました！つまり、葉を常習的に食べている上部域のサルの腸内細菌は、葉の発酵能力が高いことが証明されたわけです。

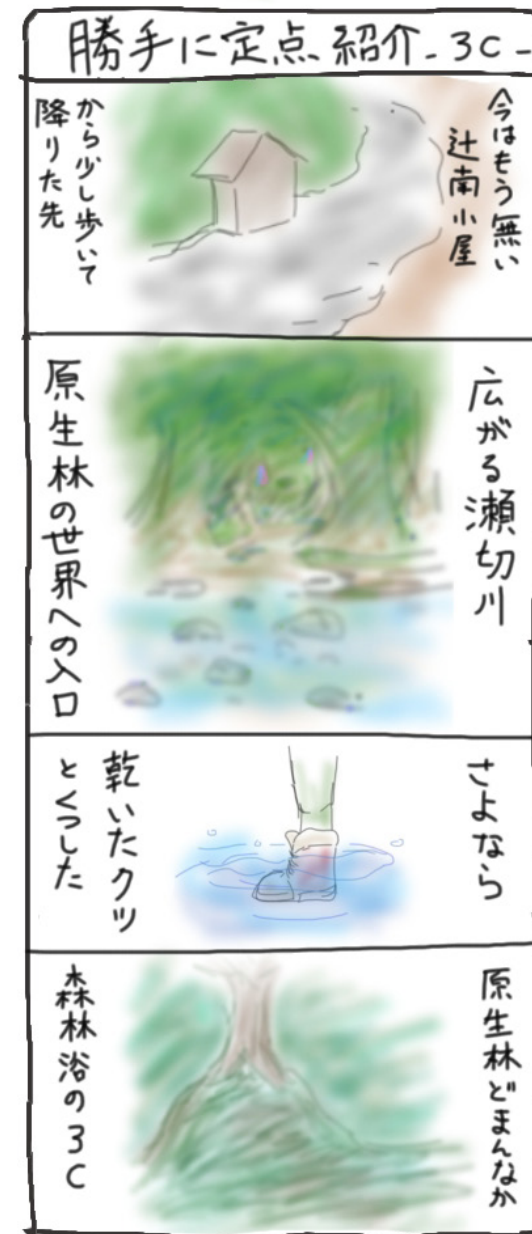
このあと、発酵の最終産物である短鎖脂肪酸の測定を業者に依頼したり、チューリッヒ大学に家族とともに3か月滞在して、腸内細菌の遺伝子解析をしたりして、最終的に論文にまとめることができました。わたしの研究室では、さまざまな食物を食べて暮らしている霊長類が、自分自身の遺伝子を変えることなく、時々刻々と移り変わる環境に柔軟に対処する方法として、屋久島のニホンザル以外にも、様々な地域の霊長類について、腸内細菌の研究を進めています。

*Hanya G (2004) Diet of a Japanese macaque troop in the coniferous forest of Yakushima. International Journal of Primatology 25: 55-71.



左、発酵実験の準備。基質に用いるヒサカキの乾燥粉末を、接種源のサルの糞との重量比が一定になるように計量して用意しています。瓶の中に入っているのは、糞とパッファを混合した懸濁液です。右、発酵実験中。二酸化炭素を充填し密栓したあと、37度のウォーターバスにつけて、24時間嫌気状態を保って発酵させます。

ヤクザルなよんま⁴

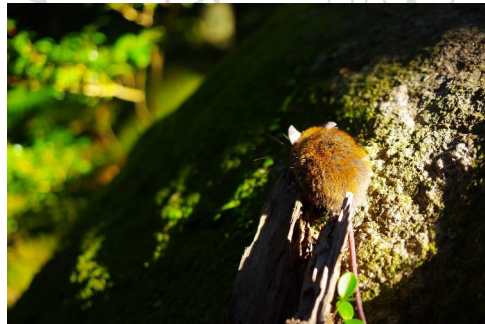


屋久島の森の住人たち

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

ヒメネズミ
(*Apodemus argenteus*)
アカネズミ
(*Apodemus speciosus*)

齧歯目ネズミ科アカネズミ属。いずれも、北海道・本州・九州・四国、およびその近隣の属島に生息する日本固有種。



ヒメネズミ：小さい方、尻尾が長いこととかわいいことが特徴



アカネズミ：大きい方、目が大きくて噛まれるととても痛い

ヤクザル調査で森に入った時、足元をよく見ると傾斜地などに500円玉くらいの穴が開いているのを見つかることがあります。今回はその穴で暮らす小さなネズミたちを紹介します。

私たちの調査フィールドである屋久島の森の中には主に2種類の森林棲の野ネズミ、ヒメネズミとアカネズミが生息しています（里の方にはハツカネズミ・ドブネズミもいるようで、縄文杉付近の高塚小屋あたりではドブネズミも出ると聞いたことがあります）。ヒメネズミ・アカネズミともに本州ではほぼどこにでもいる普通種ですが、屋久島が分布南限となっています。サイズは、ヒメネズミの方が小型で15-20g程度、アカネズミは30-60g程度です。

どちらも基本的には夜行性なので日中に見かける機会は限られるとは思いますが、カメラトラップの映像を見ると夜中にちょろちょろと動き回っているのが確認できます。この記事を読んでいるヤクザル経験者の中には夜にテントの中に侵入されて大事なおやつがかじられてしまった方もいるのではないのでしょうか。私が鹿之沢小屋で調査していた時には軒下に大き

なアオダイショウが2-3匹たむろする中、ものともせず元気な我々の食材をあさってくれました、

これらのネズミたちは森の中で植物の種子を運んだり、昆虫類などの小動物を捕食したり、猛禽類やコイタチなどに食べられたりとせわしない毎日を送っています。近年では外から入ってきたタヌキのため糞にもネズミの骨らしきものがあったり、西部林道にはノネコも入ってきてしまっているので、ネズミにとっては厳しい環境になってしまっているようです。

そういえば西部林道の森の中でヤクザルの群れに囲まれながらネズミ調査をしているときに、捕まえたヒメネズミを放獣したところ、若いサルが猛ダッシュでネズミを追いかけるのを見たことがあります。なんとか逃げ切っていたようでしたが、捕まっていたら食べられていたんでしょうか、どうなのでしょう。あまり想像したくないですね。

捕まえたネズミはマーキングして逃がしていくのですが、そのタイミングが一番の楽しみでもありました。枝に乗せたときに器用にバランスをとって枝をつたいながら下に降りていく姿、地面の巣穴に一度逃げ込んだ後、少し待っていると近くの他の穴から様子を伺いながら顔を出す様子など、ネズミのかわいい仕草の詰め合わせを見る特等席になっていました。なにより日中のネズミを撮影できる数少ないシャッターチャンスだったのでいつも息を殺して巣穴の前で待機していたのを思い出します。

みなさんもまた屋久島に行く機会があれば、山道の脇にある小さな穴を眺めて、たくましく生きる小さな生き物の姿を想像してみてください。

(肥後悠馬 2012-2015 参加)

わたし(半谷)が、20数年屋久島に通って、ネズミを見たのは3回だけ。ところが、肥後さんが試しに大川林道終点のテノ場で、100mくらいの間に5つ罠を仕掛けたら、3つにネズミがかかっていました。屋久島の森には思いもかけないほど多くのネズミがいるようです。

24時間戦えますか 2

バブル期のCMソング「24時間戦えますか」は、調査隊の替え歌の傑作「20日間戦えますか」の元歌です。朝から晩まで、いろいろ詰まった調査の一日を紹介します。



定点に着くまで

ようやく空が白み始めた5時45分。テン場からサンダルで行ける林道定点から、経験者でも小一時間程かかるような原生林の定点まで。それぞれの目的地を目指して、いざ出発です。初めての定点に行く人を先頭に、経験者はあとに続きます。過去のヤクザル調査隊員が木に結わえた紐を目印に、地図とコンパスで進む方向を確認しながら歩きます。慣れない山歩きは足元に気を取られ、目印を見失いがちです。けれど困っていても後ろの経験者たちは次の目印の場所を教えてくださいません。自力で定点までたどり着くことで、ひとりで帰ってこられるようにするためです。

定点は日替わりで持ち場が変わるため、今日初めて行った定点も、明日には経験者として別の誰かを案内することがあります。一緒に目標物となる特徴のある木や帰りの景色を確認したり、瀬切川の渡り方を教わったり…山の歩き方から研究や将来の話まで、定点までの道のりは人生の先輩方から色々なことを教わる時間でもあります。ヤクザル調査隊ではそうした教えをつないでいくことも、定点までの道の醍醐味かもしれません。

道中で巻き起こるハプニングは今晚みんなに共有するネタとして温め、後ろから聞こえる何度目か分からない「あと少し！」の掛け声に、もう絶対期待しないぞと心に誓いながら懸命に歩を進めていくと、待ち望んだ定点を示す杭がやっと現れます。後ろから見守ってくれていた人たちとお別れをし、トランシーバーで調査の開始を告げれば、楽しい定点の始まりで

す。

(悪天候などの影響でテント生活ができない場合、やむを得ず下界から調査地へ行く日もあります。そんな日は車に乗り込み、お留守番の人たちに見送られての出発です。到着までの間はお喋りしたり、運転手をよそに二度寝したり、早朝ドライブを満喫します。アスファルトで舗装された滑らかな西部林道からは一転、大川林道はスリル満点の凸凹砂利道です。揺れに身を任せ、花山歩道の入り口を過ぎると、橋の前で鉄製のゲートがあります。これを解錠するべく、ひとり車から鍵を持ち、癖のある南京錠に立ち向かう調査員には車中から激励が送られます。さらに林道を進み、飛び出してくるヤクシカの歓迎や、「万里の長城」とわたしたちが呼んでいる、展望が開けた場所から望む国割岳や口永良部島を横目に、定点へ続く分岐の近くまで送り届けてもらいます。)

(三浦たいら 2018-2021 参加)



瀬切川を渡る筆者。ある人は石の上を軽やかに飛び跳ねて渡り、ある人は靴を脱ぎはだしになり、川底にしっかりと足をつけて歩き、ある人はあきらめて靴のままざぶざぶ川に入ります。2021年から、渡渉点には安全のためロープを張ることにしました。

教える手間から言えば、定点には同じ人が繰り返し行くのが効率的です。しかし、それでは、定点間でサルの発見頻度が異なっても、サルの数が違うのではなく、調査者間で発見率が違うためだという可能性を否定できません。それで、定点の担当者は毎日交替します。

犬山より

毎日厳しい寒さが続きますが、みなさんはいかがお過ごしでしょうか。オミクロン株が猛威を振るい、身近なところでも感染した話を聞くようになりました。

コロナ下でのヤクザル調査隊も2回を経ました。個室テントや、一度に集まる人数を10人までに制限すること、一斉に集合して解散する方式を取らないことなどは、感染が落ち着いてもしばらくは続く気がしていません。本通信の連載「調査メシ」は、当初、集合日カレーライス、翌日肉じゃが、3日目豚汁…と、20年近くにわたって固定されている、12日間の夕食のメニューを順番に紹介するつもりでした。しかし、昨年の調査では、人数を切り詰めるため食事当番を置くのをやめ、夕食のおかずは、レトルトか、下界に下りる機会のあった運転手が作ってきた料理でした。次号では、「今年半谷さんが作ってくれた料理の中で、一番おいしかったのは***でした！」みたいな話になるのでしょうか…

もちろん、連載はどんなにやってもよいのです。同じことを続けるということは、ある意味、世の中の変化に合わせて、常に変化し続けるということでもあります。どんな形であっても、今年の調査が無事にできることを、心から願っています。本年も、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

ヤクザル調査隊友の会通信「瀬切の森からの手紙」第4号

2022年1月26日 発行

発行者：ヤクザル調査隊事務局

住所：484-8506 犬山市官林41-2 京都大学霊長類研究所

ホームページ：<http://yakuzaru.php.xdomain.jp/>

メールアドレス：hanya.goro.5z@kyoto-u.ac.jp